

中皮腫肺にラジウム蓄積

医学に宇宙化学導入

異分野技術活用し成果

岡山大グループが27日までに、中皮腫患者の肺組織に高濃度のラジウムが蓄積していることを発見した。従来の「アスベスト繊維説」とは大きく異なる研究成果は、医学と宇宙化学という異質の二つの領域が組み合わされたことで実現した。そこには、研究者共通の好奇心という「熱い思い」があった。(1面関連)

研究は2006年3月、山口宇部医療センターの岡部和倫医師が肺組織の分析を、岡山大地球物質科学研究センターに依頼したのが始まり。岩石や隕石など微小物質の分析技術が世界トップレベルなどと紹介した新聞記事が目にとまったという。「すごい人が岡山大にいる。その技術で肺組織を調べたらおもしろいと思った」と岡部医師は振り返る。



研究論文の確認をする中村教授(左)と岡部医師

地球物質科学研究センターの中村栄三教授らは10年以上かけ、不純物を取り除くクリーンルームと複数の分析機器を連結した「地球惑星物質総合解析システム」を独自に設計。微量のサンプルからでも、元素や物質の年代を測定する同位体の分析を可能にしていた。

今回の研究でも同システムが活躍。生体組織というこれまでとは違う検体に戸惑いつつも、中村教授らはアスベスト小体などに含まれる44種類もの元素を分析。宇宙化学の世界ではごく当たり前のやり方だが、「医学研究でここまで詳しく調べようとする発想も手法もない」と岡部医師。

中村教授は「結果は

偶然が重なった点もあるが、やってみなければ分からないという思いが大きかった。今後

も異分野との取り組みを進めていきたい」と話す。(井上光悦)